

しんじょうじょうあと
富山市新庄城跡発掘調査概報

— 新庄小学校体育館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 —

2014

富山市教育委員会

富山市新庄城跡発掘調査概報 しんじょうじょうあと

— 新庄小学校体育館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 —

2 0 1 4

富山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、富山県富山市新庄町1丁目地内に所在する新庄城跡の発掘調査概報である。
- 2 発掘調査は、富山市教育委員会学校施設課が事業主体となる新庄小学校体育館改築工事に先立つものである。富山市教育委員会学校施設課の依頼を受けて、平成25年度に富山市教育委員会埋蔵文化財センターの監理のもと、試掘調査は株式会社アーキジオ富山支店、発掘調査は北陸航測株式会社富山支店、有限会社毛野考古学研究所富山支所に委託して実施した。
- 3 試掘調査・現地発掘調査・出土品整理調査期間及び発掘調査面積・調査担当者は、次のとおりである。

試掘調査

調査期間：平成25年6月24日～平成25年8月30日

調査面積：2,330 m²

調査担当者：株式会社アーキジオ 小林修 酒谷恭子

監理担当者：富山市埋蔵文化財センター 主査学芸員 堀内大介

発掘調査（その1）

調査期間：現地調査 平成25年9月24日～平成25年12月27日

出土品整理 平成26年1月4日～平成26年3月31日

調査面積：1,000 m²

調査担当者：北陸航測株式会社 朝田要 橋口奈子

監理担当者：富山市埋蔵文化財センター 主査学芸員 堀内大介

発掘調査（その2）

調査期間：現地調査 平成25年10月28日～平成25年12月27日

出土品整理 平成26年1月4日～平成26年3月31日

調査面積：862.2 m²

調査担当者：有限会社毛野考古学研究所 常深尚 小此木真理

監理担当者：富山市埋蔵文化財センター 主査学芸員 堀内大介

- 4 現地発掘調査及び出土品整理調査に際し、下記の諸氏・諸機関のご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表します。（順不同、敬称略）

鈴木景二、高岡徹、富山市立新庄小学校、富山市新庄地区センター

- 5 出土遺物・原図・写真類は富山市教育委員会が保管している。

- 6 本書の執筆・編集は、富山市埋蔵文化財センター堀内、北陸航測株式会社朝田、有限会社毛野考古学研究所常深が担当し、各々の責は文末に記した。

凡　　例

- 1 本書で用いた座標は世界測地第VII系に基づき設定したものである。方位は真北、水平基準は海拔である。
- 2 造構の標記は、以下のとおりである。なお、発掘調査（その1）の造構は、1-●●、発掘調査（その2）の造構は、2-■■と表記する。

土壘：SA、掘立柱建物：SB、溝・堀：SD、井戸：SE、土坑：SK、盛土：SM、ピット：SP、不明造構：SX

目　　次

第Ⅰ章　調査の概要	1
1. 遺跡のあらまし	1
2. 遺物の概要	5
3. 新庄城の変遷	14

第Ⅰ章 調査の概要

1. 遺跡のあらまし

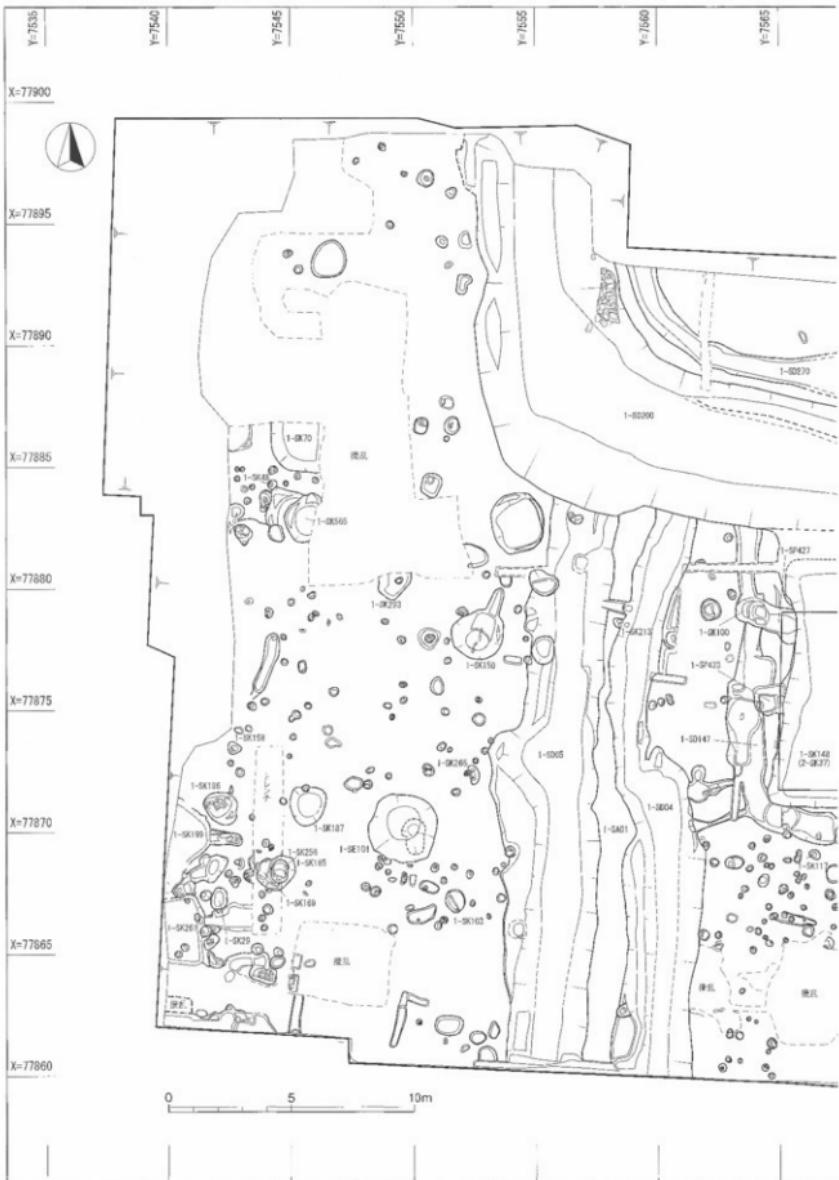
新庄城跡は、常願寺川中流左岸に位置し、標高 13～14 m の微高地上に立地する。富山から水橋へ抜ける旧北陸街道沿いという交通の要衝に作られた戦国の平城として知られる。越後上杉氏が越中支配のため戦略上の拠点とした重要な城である。江戸時代の記録によれば、城の規模は、本丸が東西 75～78間（約 137～142 m）、南北 52～70間（約 95～127 m）、二の丸が 30間（約 55 m）四方、堀幅 6間（約 11 m）と記されている。

文献に「新庄」の名が最初に表されるのは、永正 17（1520）年長尾為景がこの地で越中守護代神保慶宗と対戦し、神保氏が敗戦した「新庄の合戦」である。城は、天文年間（1532～1555）に神保方の三輪飛驒守が築城したと伝わる。その後、椎名方の畠田備後守や井上肥後守が城主となった。元亀 2（1571）年上杉氏により落城し、鶴坂長実が城主となり、翌 3 年「荒川尻垂坂の合戦」や天正 6（1578）年「地獄堂東坂口の合戦」では、上杉氏の拠点となつた。天正 8 年以降は、織田方の重要な支城であつたが、天正 11 年佐々成政による越中平定以後、城に関する文献はない。江戸時代には城跡に加賀藩の作食御蔵が建つてゐた。

新庄城跡の研究は、塩照夫氏や高岡徹氏の研究がある。高岡氏は、この発掘の成果をふまえ、「戦国期における新庄城と武将の群像」でこれまでの縄張の見直しを行つた〔高岡 2014〕。（堀内）

第 1 表 新庄城関係史

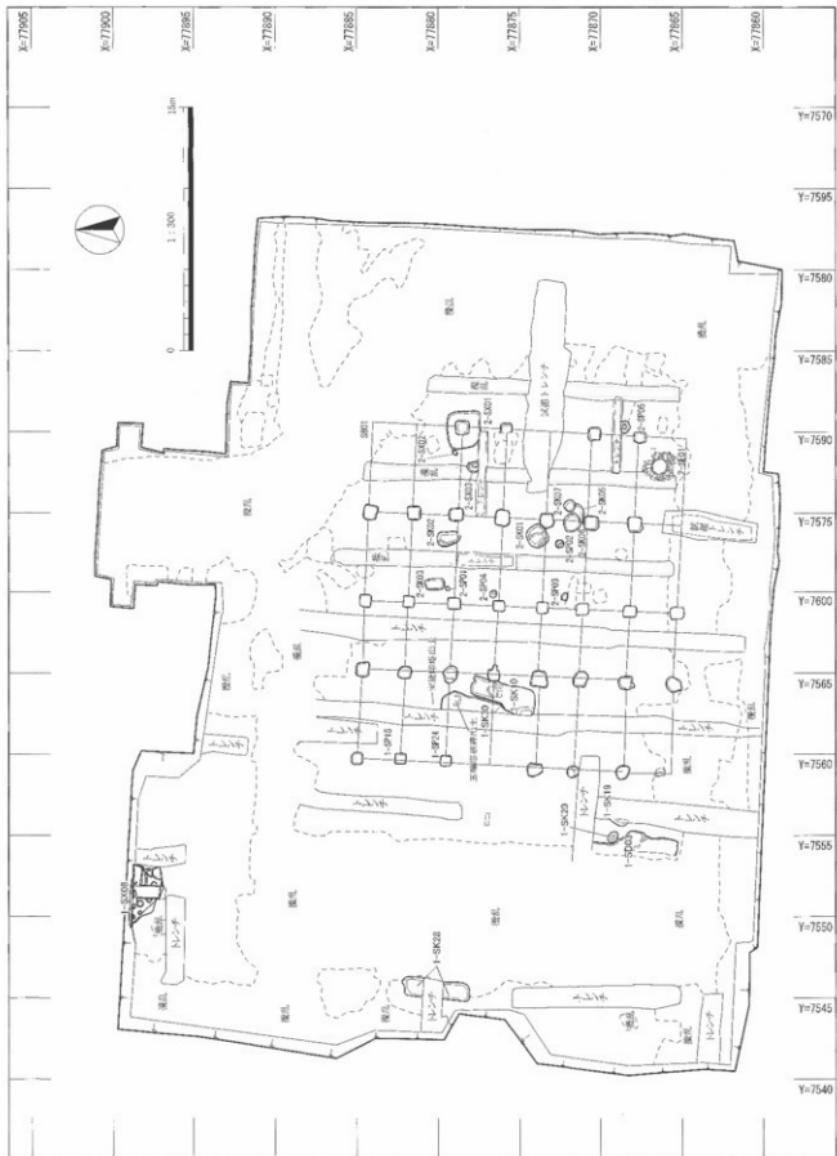
年 代	城 主	出 来 事
1520(永正17)	長尾為景 (上杉方)	越中守護代神保慶宗と対戦し神保氏が敗れる（新庄の合戦） ※新庄の名が史上にあらわれる最初 瞬時の軍事拠点か
~1550(天文19)	三輪飛驒守 (神保方)	天文年間に三輪氏が築城し代々居住する。 椎名方と争う。
1550(天文19)	畠田備後守 (椎名方)	二輪飛驒守没落し、椎名方大村城主畠田備後守が新庄城城主となる。その後井上肥後守に城を譲る。
1571(元亀2)	井上肥後守 (椎名方)	新庄城、上杉方に攻められ落城。井上肥後守敗走。
1572(元亀3)	鶴坂長実 (上杉方)	新庄城に陣し、太田保内を攻めた井上肥後守を破る。 上杉謙信、新庄城に陣し、一向一揆の勢の挾むる當山城を攻め落城させる。（尻垂坂の合戦） 飛驒の羽川馬輝盛が来陣し、上杉謙信に面賤する。
1578(天正6)	(上杉方)	織田方の斎藤新五が越中に侵攻し、新庄村の地蔵堂坂口に至ったため、上杉方の兵が新庄城より出撃し駆けう。（地蔵堂東坂口の合戦） その後上杉方の軍を破る（月岡野の戦い）
1580(天正8)	(上杉方)	織田方の神保長住、新庄城を攻め、金山城下に到着。
1581(天正9)		上杉方松倉城主河田豊前守と富山城主佐々成政が荒川の河原で駆けう（荒川の合戦）。
1583(天正11)	土田禪監 加藤大藏 (佐々方)	土肥政繁の將、杵屋平左衛門に襲われ落城。 佐々成政、越中を平定。
1587(天正15)	(前田方)	佐々成政、肥後転封により新庄城は前田利家の所有となる。
1615(元和元)		一国一城令により廢城となる。 前田利常が城跡に御陣屋をつくる。



第1図 下層造構全体図（調査区その1）



第2図 下層遺構全体図（調査区その2）



第3図 上層遺構全体図

2. 遺物の概要

(1) 調査区その1

遺物は弥生土器、古墳土師器、古代土師器、黒色土器、須恵器、中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、中国製磁器（青白磁、青磁、染付）、越前、信楽、伊万里、瓦質土器、近代陶磁器、土製品（土錘、壺、埴堀、鞴羽口）、石製品（砥石、石臼、板石塔婆、宝篋印塔）、金属製品（銅錢、釘、鉄滓）、木製品（漆器椀、箸、曲物、円形板、下駄、板材）、種子、骨等が出土した。古代、中近世の食膳具を主体とし、中でも中世土師器の比率が高い。このほかでは鞴羽口や鉄滓など鍛冶関連の遺物が多い。

須恵器（1～8）：壺蓋（1～3）、壺（4～6）、高壺または脚付盤（7）、硯（8）がある。8には透かしを5方向に施す。壺、甕なども出土した。8世紀～9世紀前半、奈良～平安時代前半を主体とする。

古代土師器（10・11・14・15）：椀である。11・14・15の外面には墨書きが残る。10・11は9世紀、14・15は10～11世紀のものである。出土量は中世土師器に次いで多く、台付のものが一定量含まれる。器種は椀がほとんどを占め、壺や甕などはきわめて少ない。

黒色土器（12・13）：椀である。13は絞り出し高台で底部外面に菊花状の痕跡が残る。10世紀後半から11世紀、平安時代後期のものである。

中世土師器（16～90）：大きさは口径7～8cm、15cm前後が主体であるが、20cm前後のものもある。16・17、59～63はロクロ成形である。59～63は口径15cm前後、胎土は緻密な白色土、成形は外底面に手持ちヘラケズリを施すなどの特徴を持つもので、主に城館遺跡で出土する。小出城や井口城などで出土事例がある。18～58、64～93は手づくね成形である。81～85、90は、口縁部外面に強い横ナデを1段施し底部との境に段を持つ。中世土師器は出土遺物の大半を占め、完形のものが多く出土した。15世紀後半～16世紀、室町時代後期から戦国時代を主体とする。

古瀬戸・瀬戸美濃（94～100）：94は古瀬戸の卸皿で14世紀前半のものである。95・96は大窯期の皿で15世紀末・16世紀後半のものである。99は古瀬戸の香炉で、三足を有する。完形で出土した。15世紀のものである。100は壺である。94～100には灰釉を施す。時期は13世紀から16世紀までに幅広い。このほか天目茶碗が出土している。

中国製磁器（101～107）：青白磁（101）、青磁（102～107）がある。青磁は龍泉窯系、同安窯系が出土した。102～107は龍泉窯系の椀である。104は体部外面に片影蓮弁文を施す。太宰府編年龍泉窯系椀II類で13世紀のものである。105は体部外面に簡略化した蓮弁文を施す。106、107は見込みに印可を施す。105～107は太宰府編年龍泉窯系椀IV類で14世紀のものである。

珠洲（108～113）：鉢（108～112）、甕（113）がある。109は口縁内側に回転ハケメを施す。111は口縁部がやや内傾し内側に面を取る。鉢は8目1単位である。鉢が多く、壺、甕などは少ない。吉岡編年VI期～V期、14～15世紀前半（鎌倉時代末期～室町時代）のものを主体とする。

越前（114～116）：鉢（114）、甕（115・116）がある。114には鉄銷釉を施す。116は1-SK256に正置されていた。114は瀬戸美濃で、窑窓末、15世紀後半のものである可能性がある。

土製品（117～120）：壺（117）、埴堀（118）、鞴羽口（119・120）がある。117は外面全体に二次被熱を強く受け黒色化する。119は先端部がガラス状に融解、120は鉄滓が融着している。鞴羽口は、精練鍛冶造構1-SX08や新庄城IV期の堀1-SD200など調査区北東側から、多量の鍛練鍛冶鉄滓とともに多く出土しており、新庄城で鍛練鍛冶が行われたことを証明する。

金属製品（121）：銅貨で開元通寶である。このほか銅貨は洪武通寶、永樂通寶などが出土した。

石製品（122～124）・木製品（125～129）：石製品は、宝篋印塔（122）、板石塔婆（123）、石臼（124）がある。123は前面に五輪塔を刻描する。木製品は、曲物（125）、円形板（126）、下駄（127～129）がある。128・129は127の差し歯で同一の製品を構成する。

（朝田）

(2) 調査区その2

遺物は古墳時代から江戸時代後期に亘り、中世（15世紀代）が主体である。土器類には、古代の土師器・須恵器、中世の土師器皿、珠洲、常滑、瀬戸美濃、輸入磁器（青磁・白磁）、近世の肥前、瀬戸美濃、越中瀬戸がある。木製品では下駄、曲物、漆桶、将棋駒、石製品では板石塔婆、宝鏡印塔、五輪塔、石臼、茶臼がある。このほか、銅製小柄、轆羽口、鉄滓なども出土している。

平安時代までの土師器・須恵器（130～136）：土師器は赤彩の土師器高杯（130）や有台の皿（137）のほか、赤彩を含む底部回転糸切りの椀が一定量ある。須恵器では蓋（131・132）が7世紀中葉と古く、杯（133～135）は平安時代である。136は須恵器の円面鏡である。

中世土師器（138～154）：手づくねの皿が多く出土している。口径6cm代の小型品（154）はごく少なく、口径14.0cm代の大型品（144・147・150）が一定量あるほかは、大半が口径8.0～10.0cmの中型品である。中型品は灯明皿としての使用が目立つ。口縁部のナデは143を除き、それほど強くなく、見込みのナデは、「の」字状ナデ（142）、逆「て」字状ナデ（143・144）、一定方向のナデ（138）などがある。15世紀～16世紀前半のものである。

中国製磁器（155～163）：磁器は明代の青磁が多く、白磁は僅少である。碗類は割花文碗（155）・青磁碗（157）は細い線引きで蓮弁を、剣頭を波状の沈線で表すが、剣頭と蓮弁の単位は統一性が無い特徴を有する所謂細蓮弁文碗である。竜泉窯系の系譜に含まれ小野分類C群、上田分類B～IVとなる。青磁碗（158）は他の青磁色ではなく、青白の釉で貫入が顯著で竜泉窯系のシャープさと異なり、見込み・底部は露胎となることから、朝鮮系の可能性がある。青磁碗（159）は見込みに印花文がなされ、雷文帶タイプである。156は幅広の片ヘラ切り彫りで掘り込みは深く、しばしば雷文帶タイプと供判する。皿類は腰折れタイプと腰膨らみタイプがある。前者は白磁輪花皿（162）、青磁稟割花皿（160）である。後者は白磁皿（161・163）で、163は高台が緩やかに快入され、見込みと高台には胎土目痕がみられ、重ね焼きであったことが分かる。これらは15世紀前半の様相を示すものである。

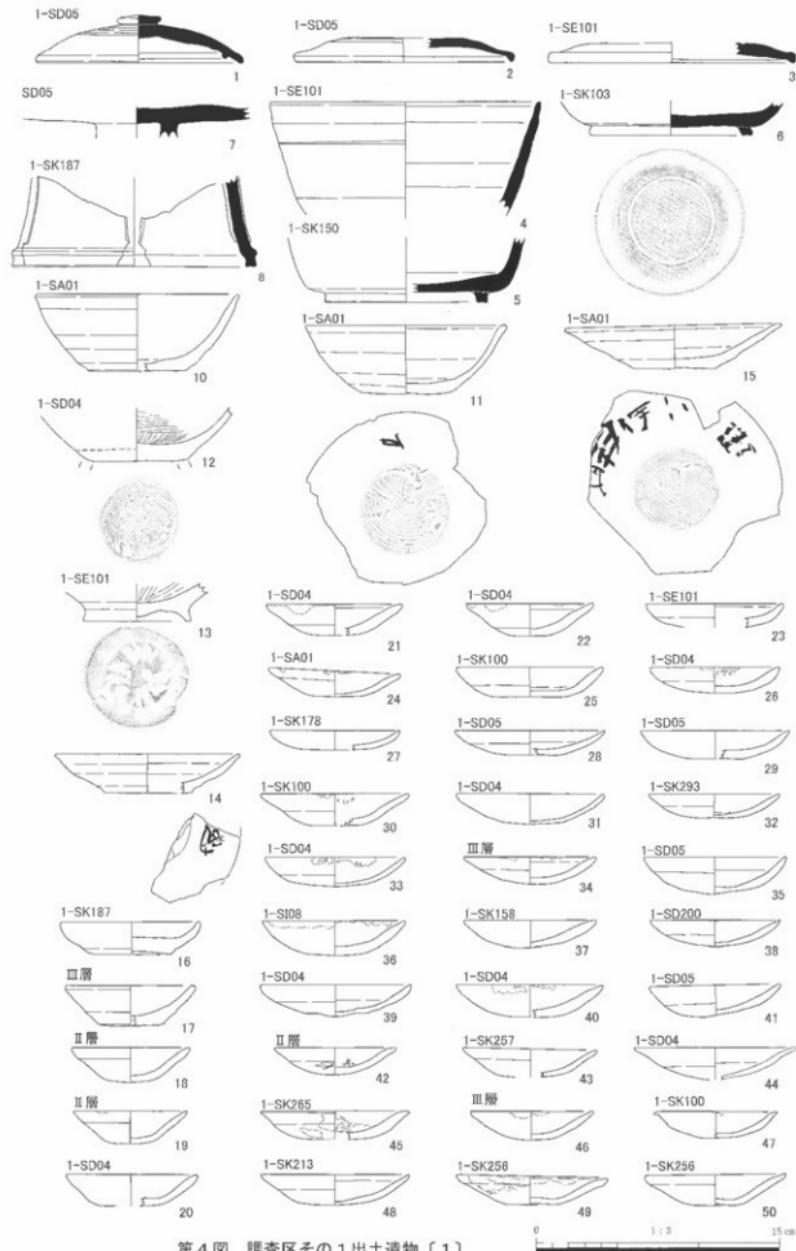
国産陶器（164～173、179～184）：164～166は古瀬戸の天目茶碗である。165は体部下半から底部にかけて錫び釉がかかる。瀬戸美濃は天目茶碗・平碗・折線鉢・卸し皿・皿の供膳具が占める。167は平碗、171は折り線鉢、168は卸しである。169は胎土・白濁釉から瀬戸美濃系でも志野に近似する。四耳壺（170）は鉄釉が掛かり瀬戸美濃と思われるが確認はない。173は越中瀬戸である。珠洲は片口（179～183）と壺（29）が大半を占める。

近世陶磁器（174～178）：肥前系の中でも唐津とわかる陶器鉢（177）は櫛描きの波状文と白濁釉をかけるV期（1780～1860年）であろう。肥前系磁器皿（174）は染付けで透明釉をかける。174は白磁小壺で見込みに「寿」文を型内する。瀬戸美濃の小碗Ⅸ無稜形で1855～1860年の生産となる。175・176は瀬戸美濃の陶器で前者は酒杯、後者は皿であろう。いずれも形状から19世紀代と思われる。

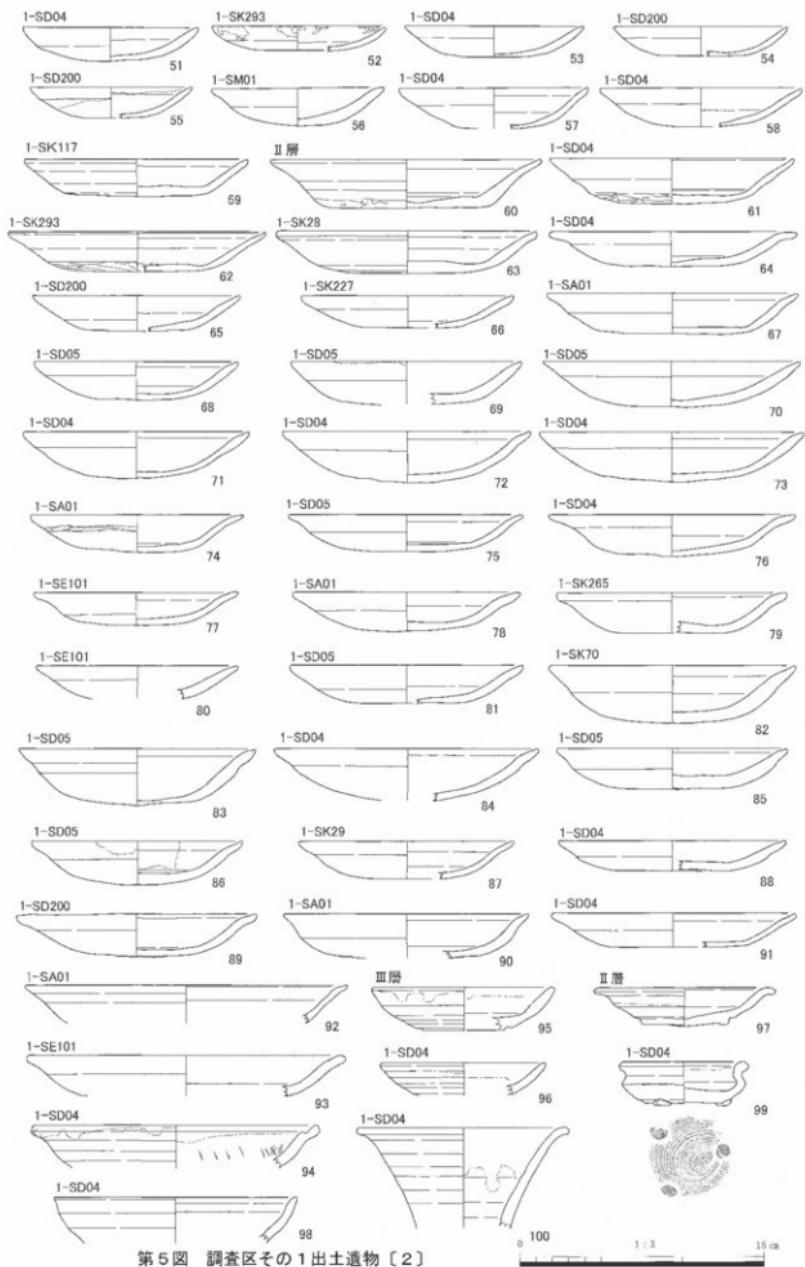
木製品（185～189）：木製品は、供膳具として漆碗（186～188）、漆皿、生活用具では下駄、遊戯具の将棋の駒、図示はしていないが貯蔵用の曲物、井戸溜めの樽の転用がある。漆碗はいずれも黒漆を基調とし朱漆で草花などを描く。188は唯一の完形品で模様は無い。下駄（185）は連齒の右用で、使用者の足親指・土踏まずの痕跡が顯著である。歯も後者が磨り減っており、使用者の履き方が分かる。将棋の駒は「桂馬」（189）である。長さ3.7cmと大型の五角形となる。「桂馬」の文字は墨による。

石製品（190～194）：190～192は井戸2-SE01から出土した小型の方錐角柱状板石塔婆である。正面に梵字パンを刻む。193は宝鏡印塔の基礎である。反花座上面に方形塔身に伴う平坦面を成形し、底面を丸く加工する。側面の四面に月輪があるが、梵字は彫られていない。194は圓基に使う基石である。

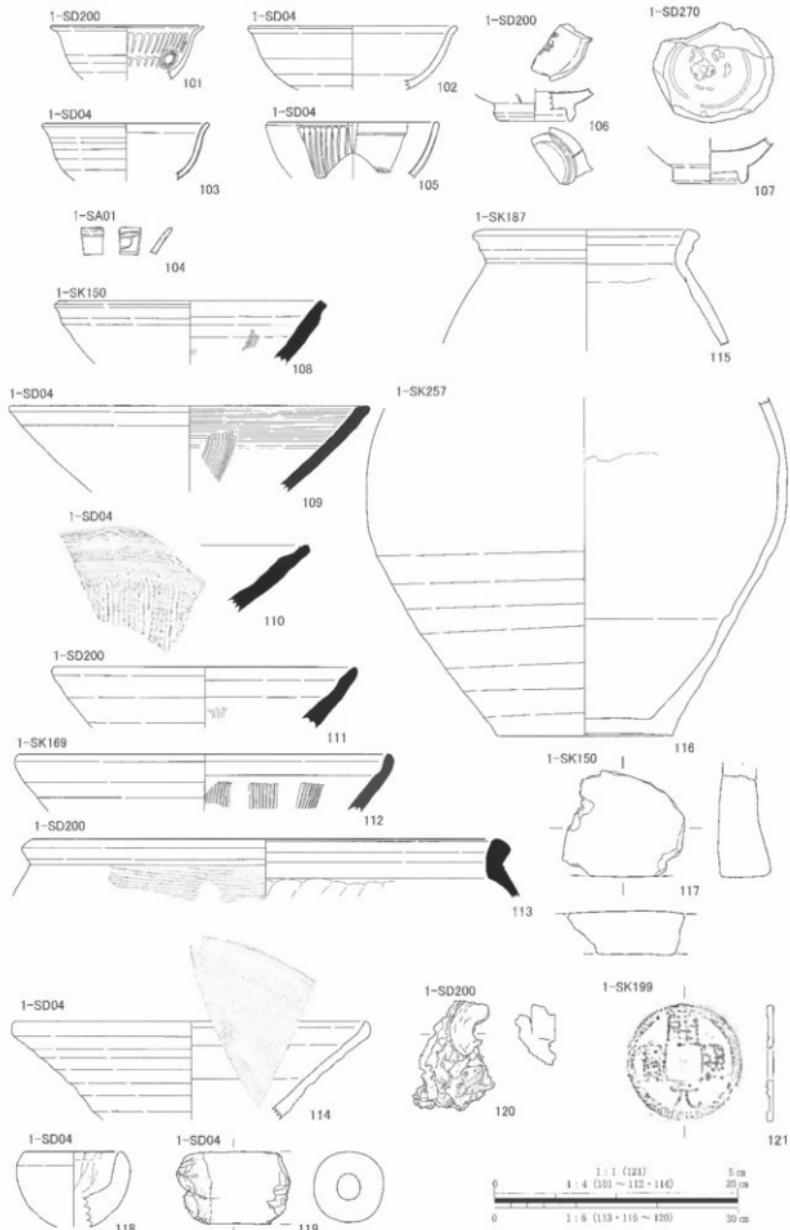
（常深）



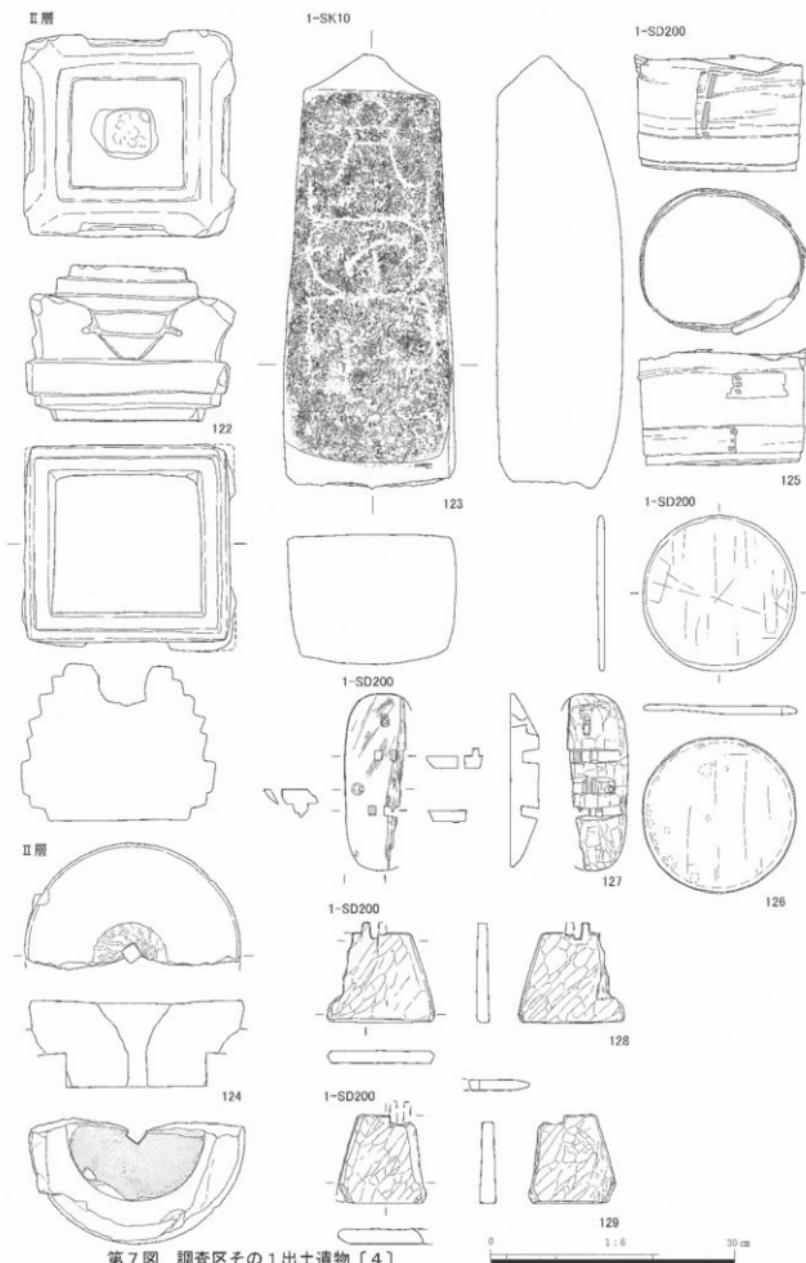
第4図 調査区その1出土遺物〔1〕

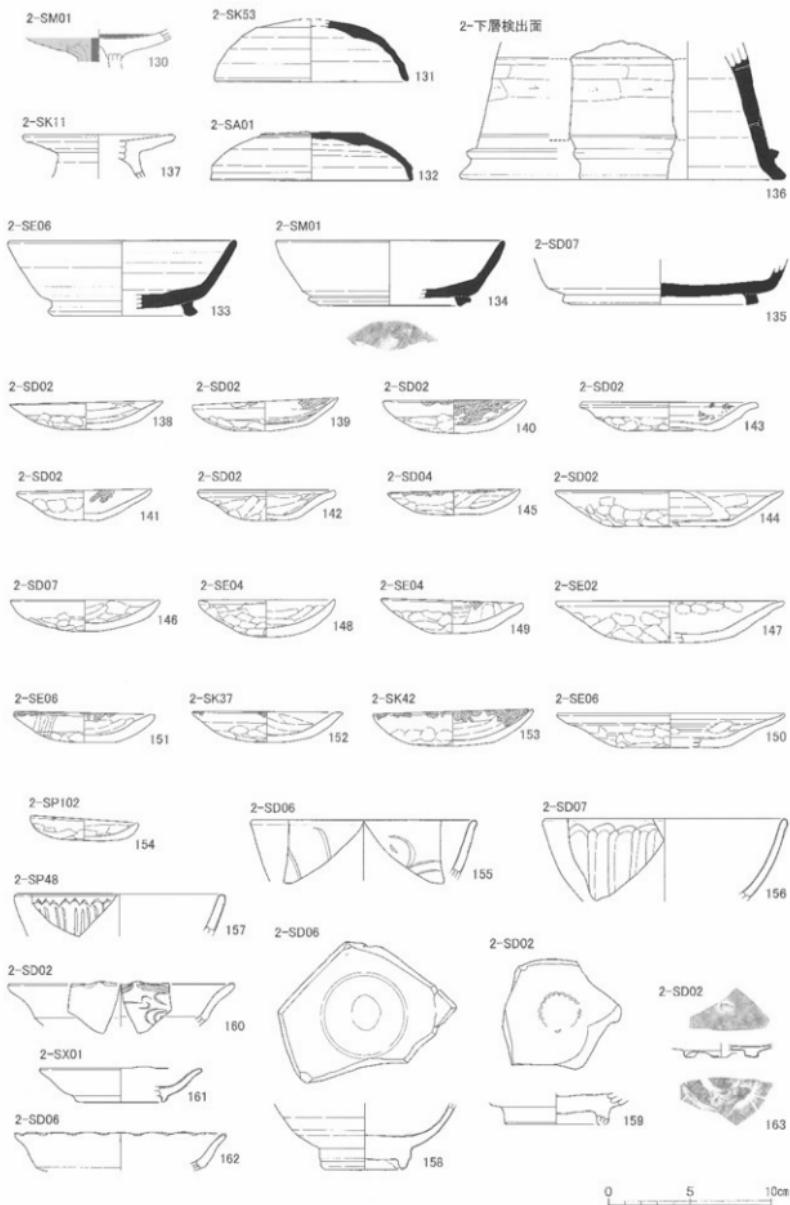


第5図 調査区その1出土遺物〔2〕

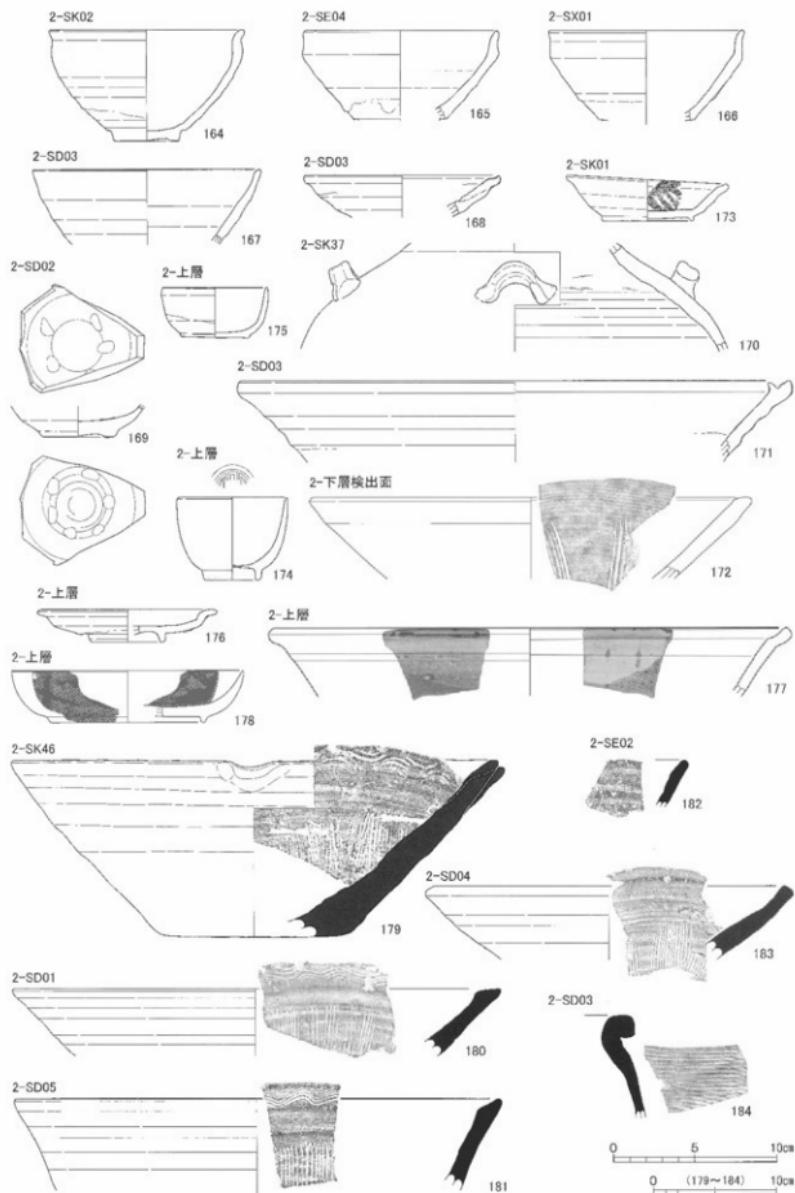


第6図 調査区その1出土遺物〔3〕

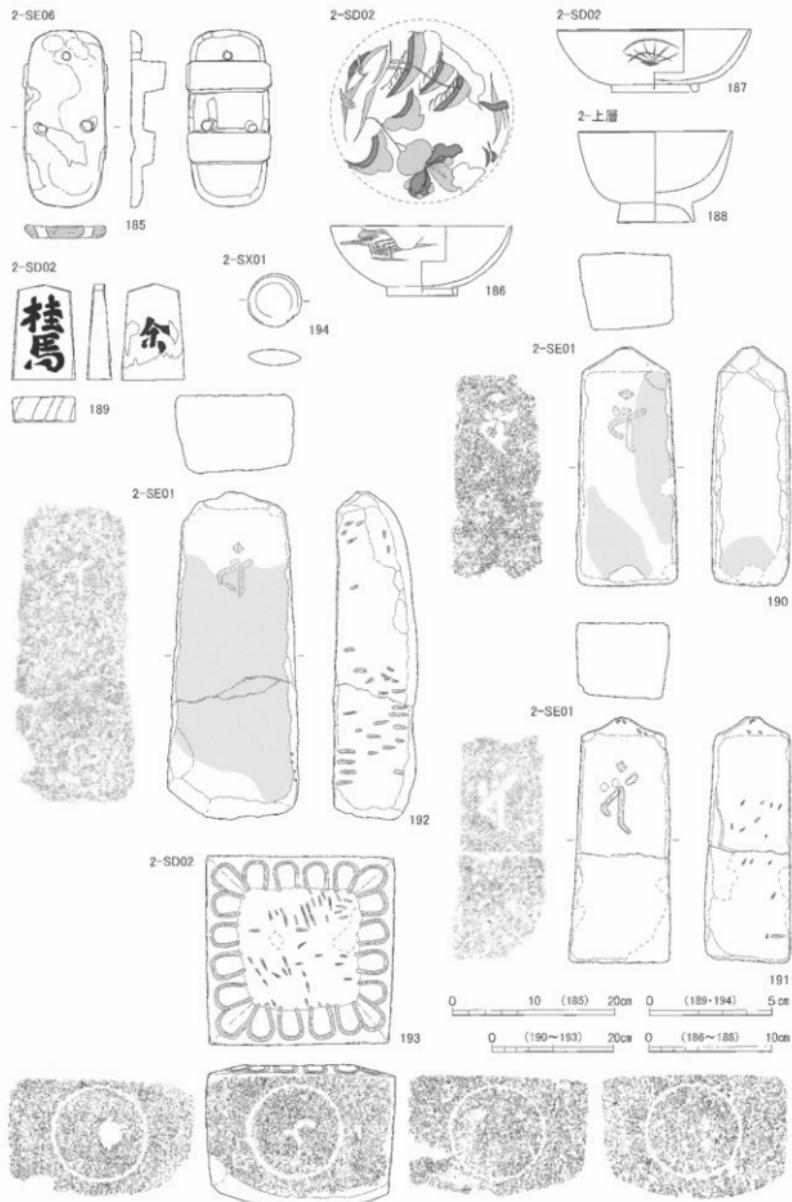




第8図 調査区その2出土遺物〔1〕



第9図 調査区その2出土遺物〔2〕



第10図 調査区その2出土遺物〔3〕

3. 新庄城の変遷（第11図）

調査区では、飛鳥・白鳳時代から近現代にかけての遺構・遺物を確認した。出土遺物や遺構の切り合ひ関係などから飛鳥・白鳳時代～平安時代の集落、室町時代の館、戦国時代の城郭、戦国時代～江戸時代の城郭が存在することが分かった。以下に、新庄城の変遷について述べる。

新庄城Ⅰ期（飛鳥・白鳳時代～平安時代、7～10世紀）

古墳時代は、包含層などから古式土師器が出土した。新庄城跡内には古墳時代の遺跡である新庄町古城遺跡が含まれており、周辺に当該期の遺構が広がる可能性がある。

飛鳥・白鳳時代は、2-SK53などから7世紀中葉の須恵器が出土した。その頃には集落が形成されたと考える。

平安時代の遺構は、井戸1-SE101・2-SE09、掘立柱建物SB02などを確認した。出土遺物から8世紀後半～10世紀に集落が形成されたと考える。藤田富士夫氏は、承半年間（931-938）に編纂された『和名類聚抄』に記される古代新川郡10郷の1つである「石勢郷」が本遺跡の北西約1.4kmに所在する中富居遺跡を中心に広がると推定しており〔藤田2004〕、本遺跡はその推定範囲のやや外側にあるが、「石勢郷」の一集落を構成していたと考える。また、円面鏡・風字鏡や墨書き土器などが出土していることから、文書を作成する公的施設の存在が示唆される。

新庄城Ⅱ期（室町時代、15世紀前半）

この時期の遺構は、堀1-SD05（幅2.5～3.5m、深さ1m）を伴う土塁1-SA01（幅2.4m、高さ0.8m）など館と推測する遺構を確認した。堀・井戸内の出土遺物の年代から、この堀と土塁に囲まれた館は、15世紀前半に築かれ、この周辺を支配した有力者が居住していたと考える。

新庄城Ⅲ期（戦国時代、15世紀後半～16世紀中頃）

この時期の遺構は、堀1-SD04、堀2-SD01（幅5.0m、深さ1.45m）に伴う土塁2-SA01（幅4.7m、高さ0.65m）などを確認した。応仁の乱前後に防御性を高めるため、Ⅰ期の館よりも堀や土塁を大型化し、城郭へと作り変えたと考える。

新庄城Ⅳ期（戦国時代、16世紀前半）

この時期の遺構は、堀2-SD03、2-SD05などを確認した。堀2-SD05には、土塁2-SA02が伴っていた。郭は、堀・土塁の北側にあったと考えられる。

新庄城Ⅴ期（戦国時代～江戸時代、16世紀中頃～19世紀）

この時期の遺構は、堀1-SD200（2-SD02）・2-SD15、大型竪穴土坑1-SK148（2-SK37）を確認した。堀1-SD200（2-SD02）は、下層で確認した堀では最も大きな堀（幅6.0m、深さ1.8～2.0m）で、Ⅲ期の城郭の防御性を高めるため、堀2-SD05に沿って掘削したと推測する。堀は水堀として機能していた。堀底からは多数の遺物が出土した。堀の北側にある郭は少なくとも2郭以上の郭があり、複郭式の平城であったと推測する。長尾為景が新庄の合戦の際に陣営を構築した城ではないかと考える。

新庄城Ⅵ期（戦国時代～江戸時代、16世紀中頃～19世紀）

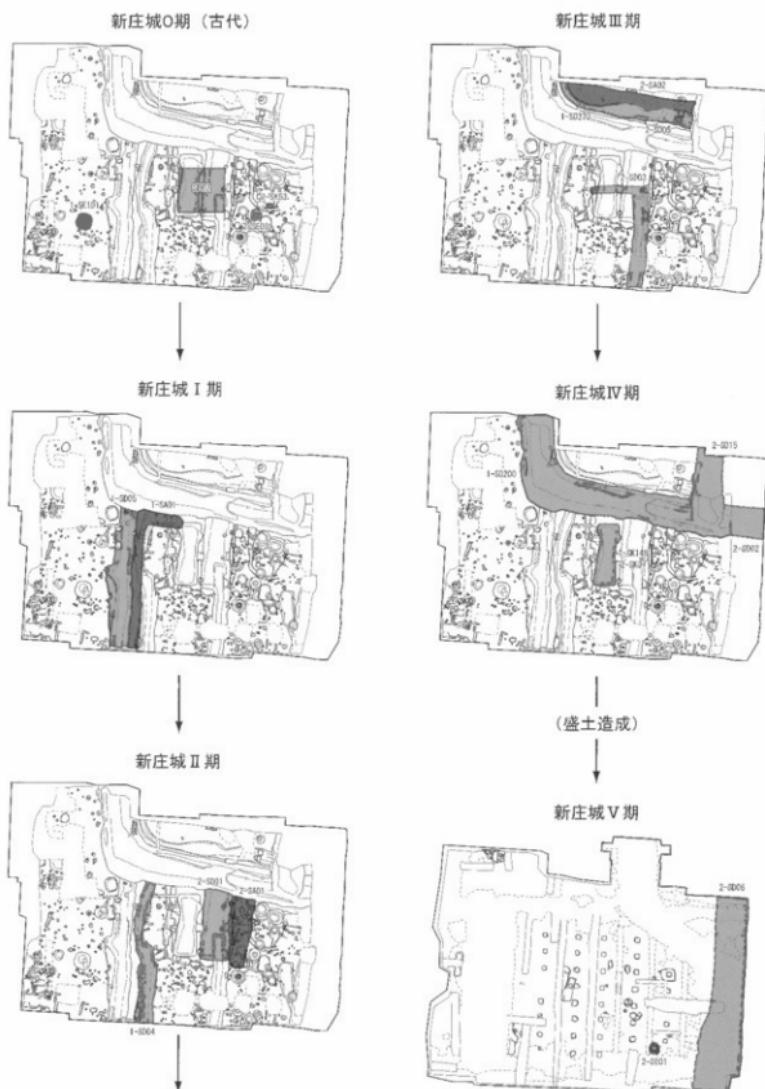
IV期の堀を含む下層で確認した城郭全体が大規模な盛土造成によって埋められ、更に大きな城郭に作り変えられた。これが、文献にあらわされる新庄城と推定する。小学校が建つ場所は、古くから「御屋敷山」と呼ばれた小高い丘であったが、校舎の建築や拡張の際に平らに削られた。そのため、V期の遺構は、井戸2-SE01、堀2-SD06以外の大部分が削られてなくなつたと推測する。堀2-SD06からは19世紀代の遺物が出土しており、堀は江戸時代の間は残っていたと考えられる。

以上のように、文献で知られている新庄城が、室町時代にこの地を治めていた有力者の館から大きな城郭へと作り変えていく変遷が分かった。

（堀内）

参考文献

- 坂頭夫 1975 「第三編 武士の住」『新庄町史』 新庄校下自治振興会
 高岡徹 2014 「戦国期における新庄城と武将の群像」『富山市考古資料館紀要 第33号』 富山市考古資料館
 鹿田富士夫 2004 「古代越中国新川郡の「道」と「郷」に関する若干の考察」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報 第2号』 敬和学園大学



第11図 新庄城の遺構変遷図

図版01 遺跡 上層



下層空中写真（西から）

新庄小学校体育馆跡地での発掘調査。下層で検出された大規模な堀が目を引く。背後に新雪の立山連峰を望む。



上層空中写真（上が北）

調査区の合成写真。柱穴列は近代の建物基礎。戦国期の石組井戸や鍛冶遺構が検出された。



下層空中写真（左が北）

調査区下層の合成写真。堀や土塁に区切られた空間に井戸跡や土坑が広がる。

図版03 調査区その1 上層



調査区その1上層遺構検出状況（上が西）

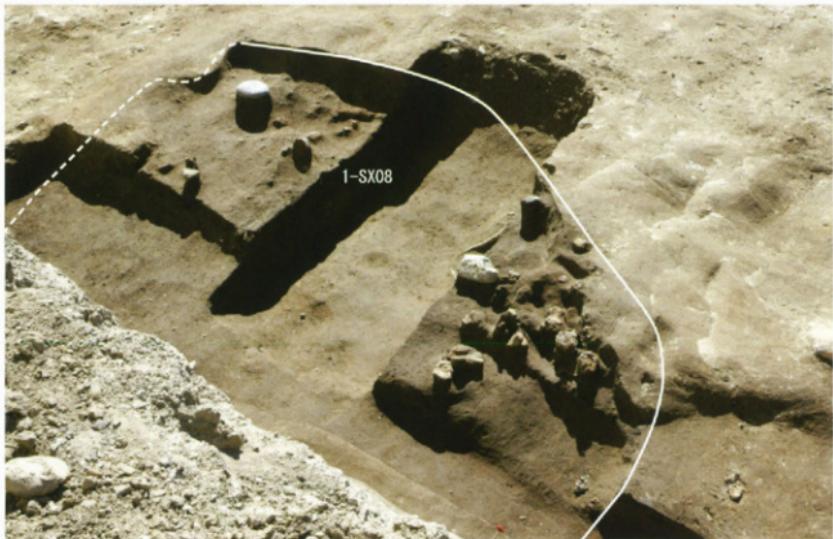
調査区その1の面積は南北約40m×東西約28mである。戦国時代の新庄城が構築された御屋敷山と呼ばれる小高い地形は、小学校建設の際に削平され、現在のような平坦な地形となった。上層で検出した主な遺構は、近代の掘立柱建物を構成する柱穴14基、近世の火葬墓1基、中世の精錬鍛冶工房1棟である。



調査区その1上層遺構掘削状況（東から）

近代の掘立柱建物建物の柱穴列には基礎の根石が残る。調査区その1では南北方向約2.8m間隔に8間、東西方向約5.6m間隔に2間を検出し、東に隣接する調査区その2に延びて東西5間以上の規模を持つ。

図版04 調査区その1 上層



精錬鍛冶（小鍛冶）工房 I-SX08 遺物出土状況（北西から）

調査区北側に位置する。直上まで削平されていたため上層で検出したが、時期は新庄城V期以前である。大きさは南北 1.9 m、東西 3.7 m、深さ 0.32 m をである。小鍛冶と呼ばれる、小型の鉄製品を鍛造する施設であつた可能性が高い。



火葬墓 I-SK30（北西から）

大きさは南北 4.5 m、東西 1.4 m、深さ 0.15 m である。遺構の真上、西側は近現代の工事の際に削平されている。遺構の重複関係から新庄城V期より新しい。板石塔婆、焼土、骨などが出土した。

図版05 調査区その1 上層



精鍊鋳冶工房 1-SX08 遺物出土状況（南から）
遺構の中央西側。取鍋、轆羽口、鉄滓、炭化材などが集中して出土した。



精鍊鋳冶工房 1-SX08 遺物出土状況（北から）
南東端は土坑状に一段深くなっており、鉄滓、炭化物、焼土塊などが集中して出土した。



精鍊鋳冶工房 1-SX08 完掘状況（上が南）
中央・東側が削平されているが、施設に伴う土坑、柱穴が 9 基確認できた。



精鍊鋳冶工房 1-SX08 断面（南から）
北側壁。中程に焼土層が確認できる。右側が堀 1-SD200 と重複しており、新庄城 V 期より古い。



轆羽口出土状況（堀 1-SD05）
鍛冶工房 1-SX08、新庄城 V 期堀 1-SD200 等から多量の鉄滓とともに 20 点以上出土した。先端部が融解しガラス質となっている。



宝篋印塔（笠部分）出土状況
火葬墓 1-SK30 北側至近から出土した供養・墓碑塔である。城館や寺院関連遺跡からの出土例が多い。

図版06 調査区その1 上層



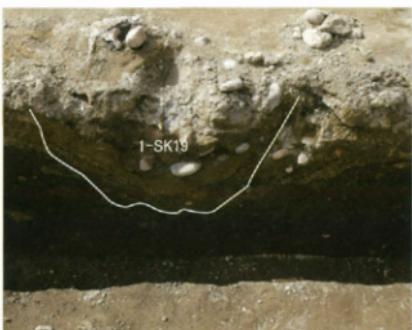
火葬墓1-SK30骨出土状況(南から)

焼土や炭化物の集中する地点直下で検出した。焼骨の直下約0.2mからは板石塔婆が出土した。



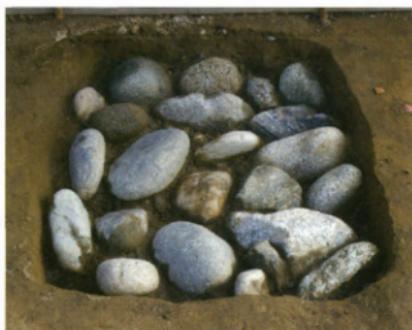
土坑1-SK20断面(北から)

溝SD03東側で検出した。径0.75m×0.5m、深さ0.45mである。被熱疊、焼土、炭化物が出土した。



土坑1-SK19断面(東から)

長さ0.9m×深さ0.50mである。被熱疊、焼土、炭化物が出土した。



掘立柱建物SB01-柱穴SP15(北から)

大きさは南北0.65m、東西0.6m、深さ0.3mである。SB01の柱穴の規模・構築法は全て同様である。



掘立柱建物SB01-柱穴SP24(上が南)

写真の1-SP15、24の根石は、柱の下に敷いて柱の沈下を防ぐものである。

図版07 調査区その1 下層



調査区その1下層遺構検出状況（上が西）

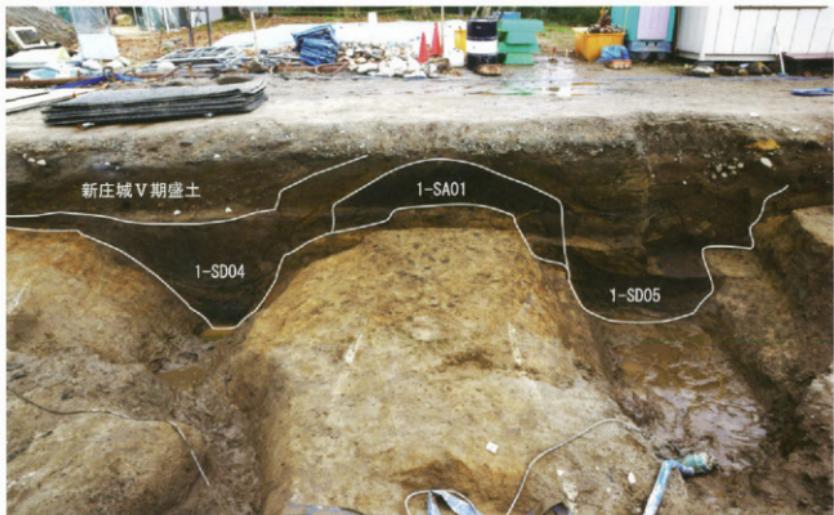
実線が遺構、破線は搅乱である。下層では平安・室町・戦国時代の遺構を検出した。遺構の種類は、掘立柱建物、城館の土堀・堀、井戸、土坑、柱穴などがある。中央左側の黒色土が新庄城Ⅰ期に構築された堀1-SD04 を伴う土塁 I-SA01 で、中程で調査区その2に向かって屈曲する。



調査区その1下層完掘状況（東から）

南北方向に掘削された新庄城Ⅰ期・Ⅱ期の2条の堀1-SD04・05は、新庄城Ⅳ期の堀1-SD200より古い。堀1-SD200が中程で強く屈曲し、北側調査区外に延びることから、Ⅳ期の主郭は調査区その1の北東であったと考えられる。

図版08 調査区その1 下層



堀 1-SD04・土壘 1-SA01・堀 1-SD05 断面（左・中央・右／北から）

調査区南壁断面。いずれの遺構も調査区外へ延びる。土壘 1-SA01 と堀 1-SD05 は新庄城 I 期で、東側に城館があったと考えられる。堀 1-SD04 は新庄城 II または III 期に内堀として開削され、同時に機能していたと考えられる。土壘左側断面上部には新庄城 V 期築城時の造成盛土が堆積する。



堀 1-SD05・土壘 1-SA01・堀 1-SD04 全体写真（左・中央・右／南から）

堀 1-SD05 は直線的で、堀 1-SD04 は中程で曲がる。大きさは堀 1-SD05 が長さ 29 m 以上、幅約 4.5 m、深さ約 1 m で、堀 1-SD04 は長さ 29 m 以上、幅約 2.5 ~ 3.5 m、深さ約 1 m である。

図版09 調査区その1 下層



堀1-SD05 断面（北から）

下層は自然堆積、上層部分は埋戻しであった。右下は堀1-SD05と重複する古代の遺構である。堀1-SD05からは平安時代から戦国時代の遺物が出土した。



堀1-SD04 断面（南から）

遺物は室町～戦国時代の中世土師器、珠洲、古瀬戸、繩羽口、鉄滓等が出土した。完形の中世土師器、古瀬戸が出土する等、遺物の残存が良好であった。



古瀬戸香炉(96)出土状況（堀1-SD05最下層）

完形で出土した。15世紀半ば、応仁の乱頃のものである。元来、香を焼く用途で使用される仏具の一つであり、宗教性、文化性が高い。



堀1-SD05西端部遺物出土状況（東から）

完形で出土した中世土師器(28)である。戦国時代のものある。堀1-SD05からは保存状態の良い遺物が多く出土した。



堀1-SD05北側下層遺物出土状況（北から）

中世土師器、繩羽口等がまとまって出土した。中世土師器は戦国時代末期、16世紀初頭頃のものである。



堀1-SD05南側下層遺物出土状況（東から）

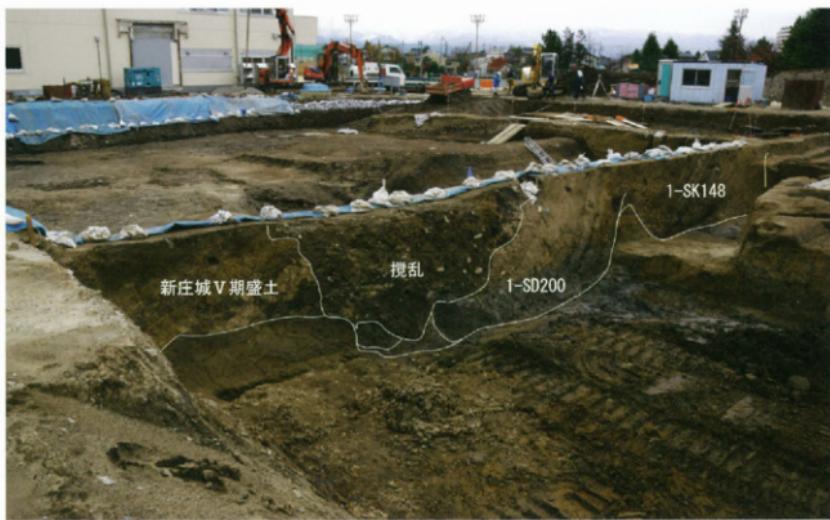
土塁1-SA01に隣接する地山直上から出土した完形の中世土師器(56)である。時期は室町時代のものである。

図版10 調査区その1 下層



堀 1-SD200 完掘（北西から）

大きさは南北長さ約18m、東西長さ約19m、深さ約1.4mである。新庄城IV期の堀で、城郭は北東側に築造された。調査区その1では堀の南西端部を調査した。堀の南西隅、特に屈曲する内側には拳大から人頭大の自然礫、被熟礫が多量に見つかった。



大型竪穴土坑 1-SK148・堀 1-SD200 断面（北西から）

調査区その2との境の断面。1-SK148・SD200埋土はいずれも新庄城V期築城の前に実施された埋立の際の盛土で、北側を下に傾斜する堆積状況を呈する。堀 1-SD200最下層からは中世土師器、珠洲、瀬戸、中国製磁器、漆器や箸、曲物、下駄などの木製品、ウマの骨などが出土した。

図版11 調査区その1 下層



堀1-SD200木製品出土状況（西から）

調査区その2との境界壁内の最下層、堀が機能していた時期の埋土から出土した曲物および円形板。



堀1-SD200木製品出土状況（近景／西から）

堀の掘削深度が湧水層より深く、下層は當時漏水状態であることから、木製品の残存状態は良好である。



堀1-SD200南西端最下層遺物出土状況（北東から）

中世土器、珠洲、漆器楕、箸、鉄滓、ウマの骨などがまとまって出土した。



堀1-SD200遺物出土状況（東から）

南西端の最下層から出土したクマの骨。大きさは長さ約24 cm × 幅約 5 cmである。



堀1-SD200石出土状況（南から）

新庄城IV期の堀1-SD200南西端で出土した礫群。内側に集中する傾向があるものの、堀1-SD200南西隅全体の広い範囲に亘るため、投棄されたものか、構築物が崩落したものかは不明である。)



堀1-SD200・溝SD270発掘（上が南）

堀1-SD200と、城館内側に平行して調査区外に弧を描き延びる溝1-SD270である。右側の盛土状地形は土壘の可能性があり、1-SD270内側に沿って調査区その2に延びる。

図版12 調査区その1 下層



大型豊穴造構 1-SK148 完掘状況（南から）

大きさは南北 7.6 m、東西 3.6 m × 深さ 1.8 m である。自然堆積である下層埋土はほとんどなく、遺物も出土していない。造構の時期は重複関係から新庄城Ⅲ期である。埋戻しのための搬入土と考えられる埋土からは、古墳土師器、古代土師器、中世土師器が少量出土している。



大型豊穴土坑 I-SK148 断面（西から）

新庄城Ⅴ期築城前に埋め立てられた。斜方向に 16 層以上堆積する埋土は大きく4、5種類に分けられ、南側下層の埋土はほぼ同質である。また斜堆積の角度は南側が緩く、北側が急で、南側下部からの堆積である。これらのことから、中層から上の埋土は複数の地域から搬入し、短期間で埋め立てた可能性が高い。

図版13 調査区その1 下層



大型土坑1-SK150断面（東から）

大きさは径 2.7 m × 2 m、深さ 1.25 m である。埋土中程に投棄された須恵器の混じる集石層があった。



土坑 1-SK158 中世土師器出土状況（東から）

調査区最西端に位置する土坑。この他にも完形の中世土師器が出土する小型土坑が複数みられた。



集石土坑 1-SK186 遺物出土状況（北から）

大きさは直径 1.27 m、深さ 0.75 m である。多量の自然石とともに、被焼した石臼や礎が廃棄されていた。



銅銭出土状況 土坑 1-SK565（東から）

写真は永楽通寶（1408 年鑄造）。このほか洪武通寶（1368 年鑄造）が出土した。室町時代の遺物である。



土坑 1-SK256 遺物出土状況（北から）

据え置かれた越前大甕の内側に中世土師器、珠洲甕体部片、礎等が納まる。戦国時代の遺構である。



土坑 1-SK169・SK185・SK256断面（南から）

2期以上の遺構が重複する。土坑 1-SK185 は径約 2 m、深さ約 1 m である。新庄城 0 期、古代の遺構である。

図版14 調査区その1 下層



竪穴状遺構1-SK199完掘(西から)

調査区外西側に拡がる円形の遺構で、大きさは長さ2.3m、深さ0.5mを測る。中国の唐代、621年に初鑄された開元通寶が出土した。



竪穴状遺構1-SK261完掘(西から)

調査区外西側に拡がる楕丸形の遺構で、1-SK199南側に隣接する。大きさは長さ3.15m、深さ0.34mである。



土坑1-SK103断面(南から)

大きさは直径約1m、深さ約1.1mである。断面から埋戻しがされたと考えられる。最下層から8世紀の須恵器坏が出土した。平安時代の土坑である。



井戸 SE101 断面(西から)

大きさは直径2.8m、深さ1.1mである。上層断面がレンズ状を呈していることから自然に堆積したことが分かる。遺物は須恵器、墨書き器、黒色土器等が出土した。平安時代の井戸である。



掘立柱建物 SB2 柱穴 I-SP423 断面(東から)

調査区その1の東端、調査区その2に拡がる古代の南北3間、東西2間の掘立柱建物の柱穴である。



掘立柱建物 SB2 柱穴 1-SP427 断面(東から)

柱穴 1-SP423 北側約2.8mに位置する。柱穴の大きさはほぼ同じで、直径約1.2m、深さ0.85mである。

図版15 調査区その2 上層



調査区その2上層空中写真全景（西から）

戦国期の盛土によって造成された上層遺構面。もともとは御屋敷山と呼ばれる小高い地形であったが、小学校建設の際に削平されている。近代の礎石建物、戦国時代の石組井戸を検出した。



井戸 2-SE01 石組截ち割り状況（西から）

V期の井戸 2-SE01 を截ち割った。掘り方は左手の北側が浅いのに対し、右手の南側は深く、南側が井戸構築の際の作業空間と考えられる。

図版16 調査区その2 上層・中層



井戸2-SE01石組検出状況（北から）

井戸2-SE01は内径0.98m、深さ2.95mの石組井戸。上層からは石臼や天目茶碗が出土した。



井戸2-SE01下部の井戸側と水溜め（南から）

井戸側の内側には上下2段に竹製の框で縛られた桶が据えられる。底面から珠洲甕の破片が出土した。



井戸2-SE01板石塔婆出土状態（南から）

石組の下層からは被熱した板石塔婆(190)が出土した。



井戸2-SE01五輪塔・板石塔婆出土状態（東から）

石組の最下層からは五輪塔の水輪1点、被熱して二つに割れた板石塔婆(191・192)が2点出土した。



中層2-SX01全景（北から）

盛土造成土のなかで検出された2-SX01。炭化物を多く含み、天目茶碗(166)や墓石(194)が出土した。



中層2-SX03土層断面（南から）

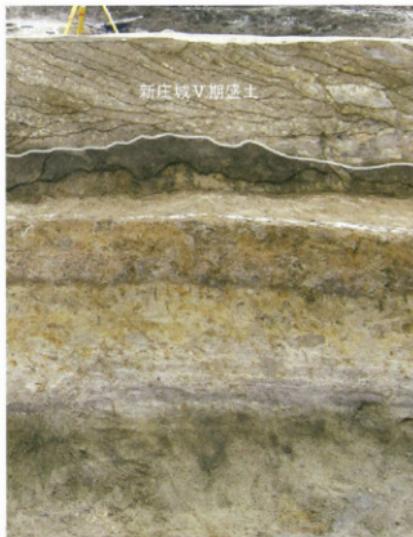
2-SX01の西側で検出された2基の炉跡の一つが2-SX03。2-SX01との関連が想定される。

図版17 調査区その2 上層・下層



堀2-SD06 調査区南壁土層断面（北から）

堀2-SD06は盛土造成に伴うV期の堀である。左下の還元土が堀底まで堆積する。削平を受けた上面からの残存する深さは1.70mである。青磁(155・158)・白磁(162)などが出土した。



基本層序上位

2-SD01の西壁。古代の造物包含層である黒色土は土壌状に掘り残されたものである。



基本層序下位

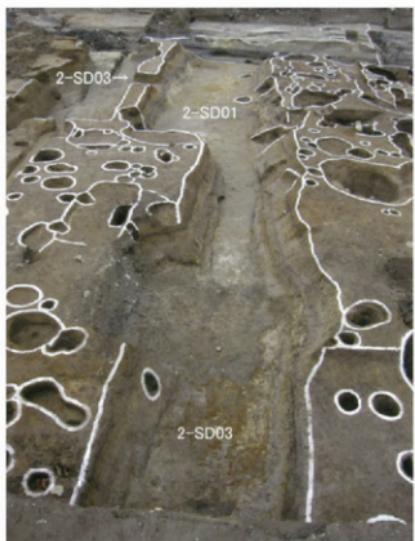
2-SD02の北壁。中央の黒色粘質土は盛土造成でも大きな土塊として特徴的に入る。

図版18 調査区その2 下層



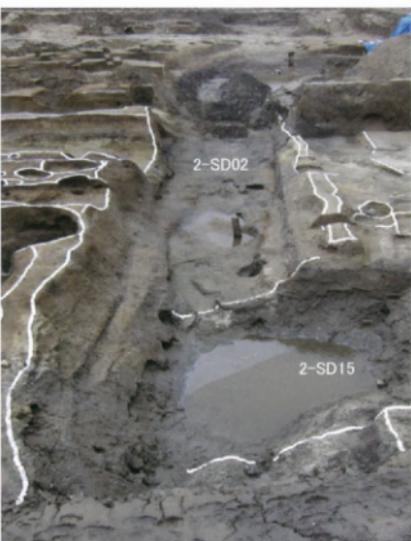
調査区その2 下層完掘全景（北から）

小学校屋上から撮影。調査区を大きく横断するIV期の堀 2-SD02 を境に、写真奥の南側には多くの井戸・土坑・ピットが広がる。



堀 2-SD01・03 全景（南から）

II期の堀 2-SD01 の南端は途切れる。堀 2-SD03 は III期の堀で、北端は西へ折れる。



堀 2-SD02 全景（東から）

堀 2-SD02 は堀 2-SD15 に先行するIV期の堀である。写真後方で右に折れ、中央には自然木が残る。

図版19 調査区その2 下層



東西ベルト①（北西から）

調査区中央の土層観察用ベルト。II期の堀2-SD01に伴う土塁2-SA01の東側には、V期の盛土造成（地山起源のブロック土）である斜堆積が観察される。



東西ベルト②（北東から）

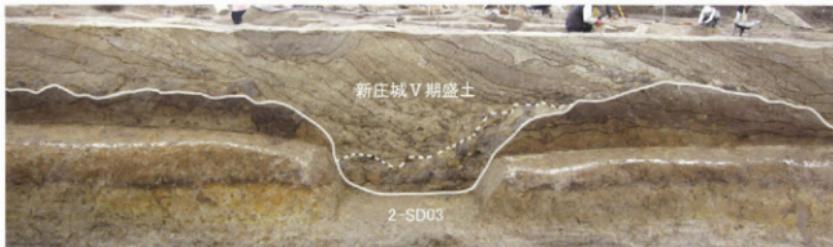
ブロック土の斜堆積に覆われた黒色土の高まりが土塁2-SA01。上部は盛土造成の際に削平される。土塁の黒色土は古代の遺物包含層に由来することから、7世紀の須恵器(132)も出土する。2-SA01の奥は堀2-SD01。



東西ベルト③（北から）

土塁2-SA01は堀2-SD01に伴うII期の土塁である。堀2-SD03は2-SD01の埋没後に掘削されたIII期の堀である。2-SD03からは瀬戸美濃(167・168・171)、珠洲(184)、常滑、土師器皿が出土した。

図版20 調査区その2 下層



南北ベルト①（東から）

調査区西端の土層観察用ベルト。堀 2-SD03 の北端が西側へ折れ曲がった地点。2-SD03 を埋める斜堆積が盛土造成で、写真右手の北側へ下がる堆積である。



南北ベルト②（北東から）

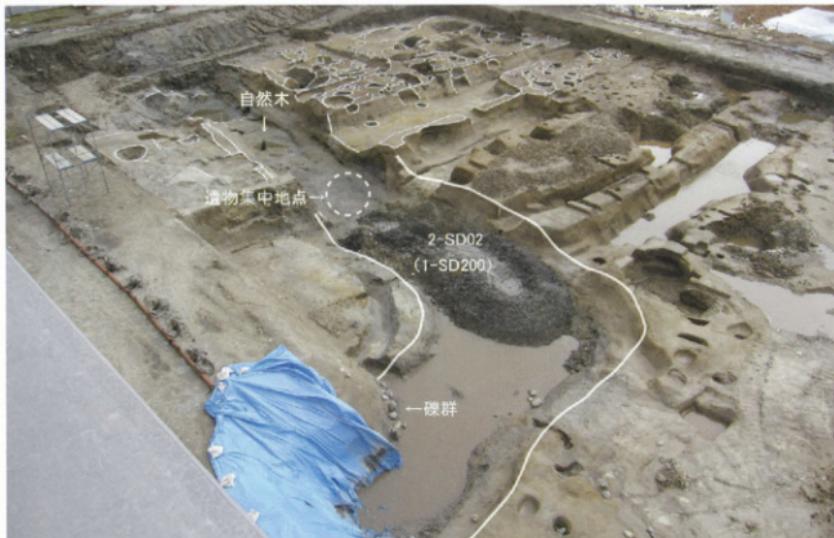
堀 2-SD02 の下部には植物遺体・動物遺体を多く含む黒色土が堆積し、このベルト付近から曲物・漆椀(186・187)・将棋駒(189)・銅製小柄が出土した。上部は盛土造成の斜堆積である。



南北ベルト③（東から）

堀 2-SD02 の北側には 2-SD05 と並走するⅢ期の溝 2-SD05 と 2-SD14 がある。両者の間には土星 2-SA02 があり、2-SD14 の周辺からは鉄滓と炭化物が多く出土した。2-SD05 からは珠洲(181)、青磁が出土した。

図版21 調査区その2 下層



堀2-SD02 全景 (北西から)

調査区その2で検出されたIV期の堀2-SD01は西へ延び、調査区その1で北へ折れる。その1の屈曲部の内側で砾群が、その2では自然木の根株が検出された。その1とその2の境界付近に遺物の集中地点がある。



調査区東側の遺構 (南西から)

堀2-SD01・02・03・06に囲まれる範囲からは、中世の井戸・土坑・ピットが多数検出された。一部には古代に遡る遺構もみられる。

図版22 調査区その2 下層



井戸 2-SE03 全景（北から）

深さ 2.05 m の石組井戸。土師器皿、珠洲、常滑、鉄釘などが出土した。



井戸 2-SE04 全景（東から）

深さ 1.87 m の井戸。土師器皿(148・149)、珠洲、天目茶碗(165)、磁石などが出土した。



井戸 2-SE05 全景（北西から）

深さ 1.73 m の井戸。土師器皿、珠洲、常滑などが出土した。



井戸 2-SE07 全景（西から）

深さ 1.56 m の井戸。珠洲、鐵滓が出土した。



井戸 2-SE09 全景（東から）

深さ 1.37 m の古代の井戸。土師器杯・壺が出土した。



土坑 2-SK31 土層断面（北から）

径 1.64m、深さ 1.44m の中世の土坑。炭化物・灰・焼土の堆積がみられる。土師器皿、珠洲が出土した。

図版23 調査区その2 下層



堀2-SD02漆椀出土状態（東から）

堀2-SD02の遺物集中地点から出土した黒漆の椀（186）。高台は剥離している。



堀2-SD02曲物出土状態（西から）

堀2-SD02の遺物集中地点から出土した曲物容器。



堀2-SD02漆椀出土状態（西から）

堀2-SD02の遺物集中地点から出土した黒漆の椀（187）。



堀2-SD02小柄出土状態（南から）

堀2-SD02の遺物集中地点から出土した銅製小柄。腐食した鉄製の身がかろうじて残存する。



井戸2-SE06下駄出土状態（北から）

井戸2-SE06から出土した小型の連歛下駄（185）。使用による摩耗が顕著である。



井戸2-SE06曲物出土状態（北から）

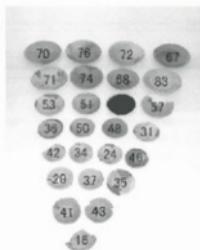
井戸2-SE06から出土した曲物容器。底板は出土しなかった。

図版24 調査区その1 遺物



古代の遺物と墨書き土器

図版25 調査区その1 遺物



中世土師器

図版26 調査区その1 遺物



中近世の土器・陶磁器

図版27 調査区その1 遺物



石製品・土製品

図版28 調査区その2 遺物



133
132
134
135
131
130
136
137

土師器・須恵器

図版29 調査区その2 遺物



中世土師器皿

図版30 調査区その2 遺物



陶磁器・基石

図版31 調査区その2 遺物



木製品（下駄・漆椀・将棋駒）

図版32 調査区その2 遺物



石製品（板石塔婆・宝篋印塔）

報告書抄録

ふりがな	とやましんじょうじょうあとはくつちようきがいほう				
書名	富山市新庄城跡発掘調査概報				
副書名	新庄小学校体育館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報				
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告				
シリーズ番号	67				
編集者名	堀内大介・朝田要・常深尚				
編集機関1所在地	北陸航湖株式会社				
編集機関2所在地	〒933-0353 高岡市麻生谷400 TEL.0766-31-6033				
編集機関3所在地	有限会社毛野考古学研究所富山支所				
編集機関4所在地	〒939-0351 射水市戸破1679-3-△ TEL.0766-67-1618				
発行機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター				
発行権限所在地	〒930-0091 富山市愛宕町1丁目2-24 TEL.076-442-4246				
発行年月日	西暦 2014年3月31日				

ふりがな 所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査面積 (m ²)	調査原因	
		山町村	遺跡番号	/			
新庄城跡	富山市新庄町1丁目地内	16201	2010449	36度 42分 8秒	137度 15分 5秒	20130924 20131227 1,862.2	新庄小学校体育館改築工事
所取遺跡名		種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
新庄城跡		集落 城郭	古墳時代		古式土師器		
			飛鳥・白鳳時代	土坑	須恵器		
			平安時代	掘立柱建物、井戸、土坑	須恵器、土師器、墨書き器	墨書き土器が出土した。	
			室町時代	堀、溝、土塁、井戸、土坑、ピット	中世土師器、珠洲、越前、古瀬戸、青磁	有力者の館を確認した。	
			戦国時代	堀、溝、土塁、井戸、七坑、ピット、鍛冶遺構、火葬墓、盛土	中世土師器、珠洲、越前、常滑、瀬戸美濃、青磁、白磁、木製品(漆器、箸、曲物、下駄)、建築部材、将棋駒)、石製品(石臼、五輪塔・板塔婆、宝篋印塔・礎石)、羽口、欽溝、御鉢、基石	館から城郭へ作り変えられた。文献にあらわされる「新庄城」を確認した。	
			江戸時代	堀	唐津、伊万里、瀬戸美濃		
			近現代	建物基礎			
契約	飛鳥・白鳳時代～平安時代の集落、室町時代の堀、戦国時代の城郭、戦国時代～江戸時代の城郭の遺構を検出し、文献でしか知られていないかった新庄城を確認した。 飛鳥・白鳳時代～平安時代の集落は、承平年間(931-938)に編纂された『和名帳抄』に記述される古代新川郡10郷の1つである「石勢郷」を構成する一郷と考える。 室町時代には、有力者の館があり、戦国時代になると、城郭へと作り変えられ、その後も改変を繰り返した。16世紀前半になると、城郭全体が埋められ、更に大きな城郭が作られたが、その後の削平により遺構のほとんどは失われていた。						

富山市埋蔵文化財調査報告書

富山市新庄城跡発掘調査概報

— 新庄小学校体育館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 —

発行日 2014(平成26)年3月31日

発行 富山市教育委員会

編集 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0091 富山市愛宕町1丁目2番24号

電話 : 076-442-4246 Fax : 076-442-5810

E-mail : maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印刷 中村印刷工業株式会社

